

Help Me!

衆議院第一議員会館
House of Representatives
First Members' Office Building



日本は危険な状況です！

私は、あなたや家族にとっても重大な薬害問題、特にベンゾジアゼピン系処方薬物（抗不安薬や睡眠薬など）による深刻な薬害現状を改善する活動をしています。そして支援を必要としています。

20年間以上、日本において、積極的に薬害注意喚起活動に取り組んできたニュージーランド出身のダグラスと申します。

身近な薬害問題を暴くドキュメンタリー映画を作成中です。

公開期限は来年末ですが、一人では出来ません。

スポンサーシップまたは寄付による暖かいご支援をお願い致します。

ご協力をお願いします



私のプロフィールや活動の詳細は添付内容をご覧ください。

共に力を合わせ、皆さんに影響を及ぼす薬害問題を少しでも減らしましょう。どうぞご協力の程、よろしく願い申し上げます。

メール：wayneinjapan@gmail.com

TEL：080-7170-0909

インデックス

1.	ご寄付される方(ご支援方法)	2
2.	「世界ベンゾ注意喚起の日」チラシ表面(BZD 処方薬物情報)	3
3.	「世界ベンゾ注意喚起の日」チラシ裏面(BZD 処方薬物種類一覧)	4
4.	米国大統領選挙立候補するケネディ(元大統領の甥)への連絡	5~7
5.	国際ドキュメンタリー映画への出演	8
6.	自作中ドキュメンタリー映画	9
7.	注意喚起活動の写真	10~12
8.	専門家や政治家からの評価・支持	13~23
	8a. 英国議会下院議員	
	8b. 英国ニューカッスル・アポン・タイン大学名誉教授・国際権威	
	8c. 英国首相	
	8d. 英国キングス・カレッジ精神医学研究所名誉教授・国際権威	
	8e. 英国議会下院の全政党議員連盟	
	8f. 英国議会への招待	
	8g. 英国精神科医・科学者・精神薬理学者・作家・名誉教授・世界権威	
	8h. 杏林大学名誉教授	
	8i. 久留米大学名誉教授	
	8j. 日本の薬害専門医・第一人者	
	8k. 英国嗜癮治療専門家	
9.	「世界ベンゾ注意喚起の日」W-BAD の評価・支持	24~27
	9a. 英国のでベンゾジアゼピン系処方薬物離脱治療クリニックを 12年間運営した神経精神薬理学の専門家から	
	9b. 科学文献にベンゾジアゼピン系処方薬の問題点を記述した 最初の専門家の一人から	
	9c. ハーバード大学名誉教授、米国国立精神衛生研究所(NIMH)の 元医系技官から	
10.	私が受けた取材	28~33
	10a. ジャパンタイムズ紙の特集記事	
	10b. ニュージーランド・ヘラルド(NZ 最大の新聞)	
	10c. 読売新聞(1)	
	10d. 読売新聞(2)	
	10e. 朝日新聞	
	10f. Stuff NZ(ニュージーランドの大手通信社)	
11.	私のことについて	34
12.	私の薬害裁判について	35
13.	私の活動やこの社会問題への貢献	36~41
14.	上記ケネディへの脚注(私のバックグラウンドなどについて)	42~45

注：ニュージーランド人になる私は、以下の内容を自ら作成しましたので、不自然な日本語の使い方があるかも知れません。どうぞご了承ください。

1. ご寄付される方

通常の薬害注意喚起活動を維持しながらも
来年末の一般公開に向けて作成中のドキュメンタリー映画を完成させ
日本における薬害現状の改善に大きな影響緒を与えるように全力を尽くします。
ドキュメンタリー映画を完成させるための目標は 180 万円になります。
是非ご支援ください。

下記の銀行口座をご確認ください。

注：私の名字は生みの家族の「ダグラス」から育ての家族の「バーンズ」に変わりました。間違えないようにご確認ください。



口座名：バーンズ ウェインジェフリー (BURNS WAYNE JEFFREY)
店番号：511
口座番号：1173925
八十二銀行
岡谷支店

2. 世界ベンゾ注意喚起の日のチラシ表面 ([チラシのダウンロード](#))

W-BAD

世界ベンゾ注意喚起の日

World Benzodiazepine Awareness Day

ご存知でしたか？

- ・ベンゾジアゼピン（ベンゾ）という一群の薬剤は、あらゆる薬剤の中で、医師が一番よく処方する薬です。不安やストレスに対する安定剤（抗不安剤）として、また、睡眠（導入）剤としてもよく処方されています。筋緊張の緩和（肩こり）にも使われ、「うつ病」や痛みを軽くするなど様々な目的で、よく処方されます。
- ・ベンゾは最長でも2-4週間以上は処方しないように勧告されています。しかし、多くの医師は、この系統の薬剤の危険性（害）を知らない（あるいはよく認識していない）ため、何か月も何年も、続けて処方しています。そのために、無防備な患者にしばしば深刻な事態を招いています。
- ・ベンゾはヘロインより依存しやすいであろうと専門家は言います。ベンゾを不用意に、急に中断すると、地獄のような苦しみが続いているかも知れませんが、ゆっくりと適切に減量すれば、そのようなリスクは小さくなるでしょう。この離脱症状は、数か月から、長ければ数年続くことさえあります（離脱症状の強さやパターン（特徴）は、ひとりひとり違います）。
- ・ベンゾは、個々の薬剤によって力価が大きく異なります。また他の薬剤と併用した場合に様々な相互作用を引き起こします。アルコールや鎮静作用を持つ他の薬剤を併用すれば、お互いの作用が強められ死に至る場合もあります。
- ・ベンゾなどの処方薬剤が、他のさまざまな薬物による「薬物乱用」の入口となる可能性もあります。
- ・長期にわたってベンゾを服用すると、不可逆的な障害を起こしうることが、最近の研究から判ってきています。
- ・医師の処方によってもたらされるベンゾ依存症による、社会的・経済的損失は計り知れません：失業や暴力、犯罪、自殺、受診の長い待ち時間、家庭内不和、事故などを引き起こすからです。
- ・専門家が何十年の間、厳格な管理をするように政府に働きかけてきました。しかし、うまくいっていません。
- ・薬害オンブズパースン会議の国への要望書（2015年）によると、日本の単位人口当たりのベンゾ系薬物の使用量は、最大消費されているデバスを除いて世界2位、デバスを含めると世界最多と考えられている（戸田克広、ベンゾジアゼピンによる副作用と常用量依存、臨牀精神薬理2013:16(6):p867-878）。（同要望書を裏面に記載のホームページをご覧ください）。注：抗うつ剤など他の向精神薬にも同様の重大な問題があります。
- ・ベンゾ系の薬剤を一気に止めたり、急に減らしたりするのは危険です。
- ・止めようと思っている人はアシュトンマニュアルを参考にして、主治医にも相談してください。注意：主治医の協力は必須ですが、ベンゾ系薬剤の書と、正しい減量の仕方を知っている医師はまれです。ですからまず、あなた自身が「アシュトンマニュアル」を事前に読んで、主治医にも「アシュトンマニュアル」を読んでもらってください。

あなたはベンゾ系薬剤を服用していませんか？

また、そういう方をご存知ないですか？

(ベンゾ系に属する薬剤の個々の名前は、裏側のリストでご確認ください)

誠実な医療を、
よりよい医療を、

私たちの手で、
私たちの手に

「賢明に、安全に」これが
「世界ベンゾ注意喚起の日」のキーワード

7月11日

3. 世界ベンゾ注意喚起の日のチラシ裏面 ([チラシのダウンロード](#))

日本で処方されているベンゾジアゼピン系薬剤および類似薬剤

一般名	商品名
ジアゼパム (標準)	セルシン、ホリゾン、エリスパン、ジアボックス、セレナミン、ダイアップ (坐剤)
アルプラゾラム	ソラナックス、コンスタン、カムダン、メデボリン
エチゾラム	デバス、エチゾラム、セデコバン、デゾラム、ノンネルブ、バルギン
オキサゾラム	セレナール、オキサゾラム、ベルサール
クロキサゾラム	セバゾン
クロチアゼパム	リセ、リルミン
クロラゼブ酸	メンドン
クロルジアゼポキシド	コントロール、バランス
タンドスピロン	セディール、タンドスピロンクエン
トフィソバム	グランダキシン、エマンダキシン、グランバム、ツルベル、トフィス、トフィルシン、トルバナシン、トロンヘイム、バイダキシン
フルジアゼパム	エリスパン
フルタゾラム	コレミナー
フルトプラゼパム	ルレスタス
プロマゼパム	レキソタン、セニラン
メキサゾラム	メレックス
メダゼパム	レスミット
ロフラゼブ酸	メイラックス、ジメトックス、スカルナーゼ、ロフラゼブ酸エチル、ロンラックス
ロラゼパム	ワイボックス、ユーバン、ロラゼパム
エスゾピクロン	ルネスタ
エスタゾラム	ユーロジン、エスタゾラム
クアゼパム	ドラール
ゾピクロン	アモバン、アモバンテス、ゾピクロン、ドバリアル、メトローム、ルネスタ
ゾルピデム	マイスリー
トリアゾラム	ハルシオン、アスコマナ、カムリトン、トリアゾラム、トリアラム、ハルラック
ニトラゼパム	ベンザリン、ネルボン、サイレス、ネルロレン、ノイクロニック、ヒルスカミン、ビビットエース、フルトラース、フルニトラゼパム、ロヒプノール
ニメタゼパム	エリミン
八ロキサゾラム	ソメリン
フルニトラゼパム	ロヒプノール、サイレス、ビビットエース、フルトラース、
フルラゼパム	ダルメート、ベノジール
プロチゾラム	レンドルミン、アムネゾン、グッドミン、ソレントミン、ネストロム、ノクスター、プロチゾラム、プロメトン
リルマザホン	リスミン
ロルメタゼパム	エバミール、ロラメット
クロナゼパム	リボトリール、ランドセン
クロバザム	マイスタン

出典：独立行政法人医薬品医療機器総合機構

公式ホームページ: www.worldbenzoday.org



薬害注意喚起活動にご協力ください。皆様のご寄付による暖かいご支援をよろしくお願い申し上げます。詳しくはホームページまで。

関連サイト: www.benzo-case-japan.com

4. 米国大統領選挙立候補する ケネディ（元大統領の甥）への連絡



2024年米国大統領選挙立候補するロバート F. ケネディ Jr. は40年間のベテラン弁護士として薬剤企業の裏や薬害による社会への悪影響をよく精通している方ですので、下記のとおり、私は本人への連絡を送ってみました。

ロバート F. ケネディ Jr と関係者の皆様

現状改善への支持

抗不安薬・睡眠薬（ベンゾジアゼピン系薬剤）などによる薬害について

「世界ベンゾ注意喚起の日」(World Benzodiazepine Awareness Day)、通称 [W-BAD](#) の創設者として、製薬業界による影響、またそれに伴う政府の弱体化や社会経済コストに対応しようとなさっているあなた方の計り知れない試みに心から共感します。

W-BAD のウェブサイト：www.worldbenzoday.org

20 年間以上、処方による薬害問題、特にベンゾジアゼピン系処方薬（抗不安薬・睡眠薬など）の危険性や社会経済的コストについて、積極的に啓発をして参りましたが、薬害当事者にもなる私は、最近受賞したドキュメンタリー映画『[As Prescribed](#)』に出演するよう招待されました（シェフィールド国際ドキュメンタリー映画祭・[Vimeo](#) 予告編 3:10 参照）。

ホームページ：www.asprescribedfilm.com

シェフィールド映画祭：www.sheffdocfest.com/film/prescribed

予告編：www.vimeo.com/311914042

日本で追い込まれているニュージーランド人として、私の注意喚起活動の例を少し挙げると、日本厚生労働省での定期的な陳情訪問、衆議院での発表、第 1~2 衆議院会館および参議院会館において 713 人の国会議員全員への情報配布などが含まれます。また、私が設立した W-BAD を通じて、当活動を支持する公式決議をアメリカの 4 つの州から得ることができました。

米国の州決議：www.worldbenzoday.org/staterecognition

薬害を専門とする世界有数の専門家たち（アシュトン、ラダー、別府、ヒーリーなど）と長年密接に関わってきた私は、最近、ミカイラ・ピーターソンと彼女の父親ジョーダン・ピーターソンからの依頼を受け、処方ベンゾジアゼピン系薬剤の危険性についての記事作成をして参りました。

ジョーダン・ピーターソン（高名なメディア・パーソナリティ、心理学者、ベストセラー作家）は、睡眠薬として処方されたベンゾジアゼピン系薬剤を服用したことで命懸けの経験をし、この薬害問題は「大惨事」だと同人が強調しています。

W-BADのような活動を含め、草の根レベルでの取り組みや共同努力が、現状を変えるための政治レベルでの力に繋がれば幸いです。

上記を念頭に置いて、W-BAD イニシアチブの進展、前例のない作成中ドキュメンタリー映画の完成、作成中関連書籍の出版（故アシュトン教授が推薦）、より幅広いメディアへの露出などにご協力いただける潜在的な支援者へのご紹介、また W-BAD のウェブサイトに掲載する簡単なメッセージをご用意して頂ければ大きな励ましになります。

その結果、草の根レベルの支持を促すと同時に、より大きなうねりを生み出し、ひいては必要とされる現状の改善をさせるリーダーへの支持を高めることに繋がれば幸いです。

世界有数の著名な専門家たちから応援のメッセージを受け取って参りましたが、政治家から頂いたのは1通のみです。それは英国議会の故ジム・ドビン議員からのもので、彼は次のように書いています。

記

「親愛なるウェイン、これらの処方薬物の危険性に関する情報を発信するため、あなたが行っていることは素晴らしい。あなたの活動を通じ、多くの人々が知識を得ることを願っています。ジム・ドビン下院議員。英国議会下院、ロンドン。」

以上

私は、あなた方の誠実さと、国民と共に働こうとする意欲に感謝しています。誠実さ、品位、信頼、尊敬といった基本的な価値観を取り戻そうとしているあなた方の気持ちを共有しつつ、現状の改善という最終的な共通の目標に少しでも貢献できるよう、上記の草の根運動についてご配慮いただければ幸いです。短い応援メッセージでも大歓迎です。

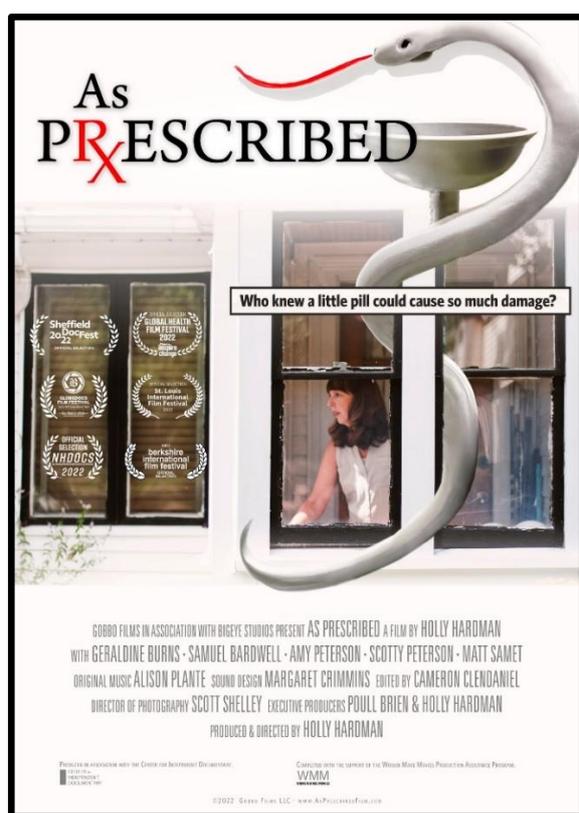
共に力を合わせて、現状からの改善を少しでも実現させるようお互い頑張りましょう。今年の大統領選挙に向けて、皆様のご健闘をお祈りいたします。

敬具

ウェイン・ダグラス

5. 国際ドキュメンタリー映画への出演 As Prescribed

上記のとおり、20年間以上、処方による薬害問題、特にベンゾジアゼピン系処方薬（抗不安薬・睡眠薬など）の危険性や社会経済的コストについて、積極的に啓発をし、薬害当事者にもなる私は、最近受賞したドキュメンタリー映画『[As Prescribed](#)』に出演するよう招待されました。



2016年7月11日、最初の「世界ベンゾ注意喚起の日」に、日本各地（南は沖縄、北は青森）から30人以上の薬害被害者・参加者は陳情訪問のために厚生労働省の前で集まる場面が登場。ホームページ www.asprescribedfilm.com 予告編 www.vimeo.com/311914042

6. 自作中ドキュメンタリー映画 Sentence by Prescription

この作品を完成させ薬害の現状を変えます！



人生を奪った一枚の処方箋

正義への訴え

(自製ドキュメンタリー映画)

可能性溢れたエリート青年として、ニュージーランドから来日した彼。日本医療による薬害と、その事実をごまかした裁判の計画的な不正により、人生が完全に奪われてしまいました。深刻のダメージを被りついには母国に住む力も失いました。58歳の独りぼっちになった今も日本で絶望的な状況に追い込まれながらも、薬害注意喚起活動を続けています。この動画では全ての真実を公開。

ご協力をお願い

この映画を来年末までに完成させるにはおよそ180万年円が必要となります。是非ご支援ください（[「ご寄付される方」](#)のページをご参考ください）。

7. 注意喚起活動の写真



新宿駅前でのチラシ配布



厚生労働省での W-BAD 陳情訪問



厚生労働省での要望書提出



新宿駅前での街頭演説



衆議院第一会館での発表



衆議院各会館・参議院会館での情報配布



安倍総理の事務所までの情報配布



参議院会館の川田龍平の事務所において、
薬害オンブズパースン会議代表の別府宏圀
医師とジス環境改善会代表の川島氏と
一緒に面談に出席



れいわ新撰組街頭演説において
薬害について山本太郎への質問・訴え、
また W-BAD のチラシ配布



国への要望書について
薬害オンブズパースン会議の代表らと
記者会見への参加



参議院議員の渡辺善美との面談



厚生労働省での会談



参議院の川田龍平の宴会において、
奥さん堤未果また W-BAD 日本代表の
嶋田和子と薬害について交流



厚生労働省において衆議院で開催された「ベンゾジアゼピン系処方薬物勉強会」
についての記者会見への参加。東京都議員上田令子議員、
井上眼科病院名誉院長若倉雅人教授、
企画者の多田ゆり子も出席



2014年に横浜で開催された第16回国際嗜癖医学会での発表

8. 専門家や政治家からの評価・支持

8a. 英国議会下院議員



ジム・ドビン下院議員

2014年7月2日

(和訳文)

親愛なるウェイン

これらの処方薬物（抗不安薬・睡眠薬）の危険性に関する情報を発信するため、あなたが行っていることは大変素晴らしい。あなたの活動を通じ、多くの人々が知識を得ることを願っています。

ジム・ドビン下院議員

英国議会下院、ロンドン

8b. 英国ニューカッスル・アポン・タイン大学名誉教授・国際権威



ヘザー・アシュトン教授

2014年3月27日

(和訳文)

ウェイン・ダグラス氏は、この [Benzo Case Japan](#) というウェブサイトを作成するにあたり、他者の利益とするため彼自身の苦難を公開するという勇気のある人物です。彼の目的は、向精神薬、とりわけベンゾジアゼピン系薬剤（抗不安薬・睡眠薬）のような安定剤の有害作用について、医師や一般市民に向けて注意をより強く喚起することです。

日英両言語で読むことが出来る、この上手く構成されたウェブサイトでは、ウェインが日本で生活していた時、いかにして抗不安薬（ベンゾジアゼピン系安定剤）が大量かつ長期間に渡って過った処方となされていたかについて語られています。結果として、彼は処方薬物依存症となり、激しい心身の症状が引き起こされることになりました。

医師たちが無知であるため、この処方薬物がもたらす影響について情報を得るためには、ウェインは孤独な作業を強いられました。そして、薬についてより深く知った彼は、勇気をもってこの処方薬物からの離脱をやり遂げます。その後、彼は世界中の情報を更に詳しく調べ、この問題に関する“専門知識”をより深めることになりました。

このウェブサイト ([ベンゾ・ケース・ジャパン](#)) には、ベンゾジアゼピン系処方薬物について包括的な情報が詰め込まれています。またここでは、いかにウェインが医療による医原性の苦しみに耐え抜いたのか、そして、いかに東京高裁で敗れることになる裁判に備えたのか、また、薬物依存症の苦悩と同時に、あの3.11の大災害を経験した彼が、いかに福島の住人として苦しみ、そして、他の多くの住民と同じように、いかにその後の劣悪な生活環境を凌いだのかについて語られています。そのストーリーは、人としての視点、またウェインのプライベートな視点から語られたもので、心魅かれる物語になっています。

全ての医師と市民の皆さん、特にベンゾジアゼピン系処方薬物や他の向精神薬を処方されている方は、このウェブサイトを見るべきです。そして皆さんが、ウェインがこの問題に捧げてきた14年におよぶ作業と献身的な努力から得るものがあることでしょう。

[ヘザー・アシュトン](#)教授 C. Heather Ashton, D.M., F.R.C.P. 英国ニューカッスル・アポン・タイン大学名誉教授、臨床精神薬理学

8c. 英国首相



英国首相 デービッド・キャメロン
2013年10月23日
(和訳文)

「最初に、長年に渡りこの問題に熱心に取り組んできた[下院議員のジム・ドビン氏](#)に敬意を表します。そして、彼と共に[アシュトン教授](#)の功績にも賛辞を贈ります。アシュトン教授はこの領域において非常に豊富な専門知識をお持ちになります。」

「このベンゾジアゼピン処方薬依存症の問題は深刻であるというジム・ドビンス氏の主張はもっともであります。ベンゾジアゼピン依存症に苦しむ人は、通常の薬物中毒者とは異なり、医師が繰り返し処方する安定剤（抗不安薬・睡眠薬）で依存症になってしまっているのです。公衆衛生大臣は、関連するガイダンスが発行されるようにします。」

2013年10月23日
英国首相 デービッド・キャメロン

注：前記の推薦文を私（ウェイン・ダグラス）に寄せて頂いた英国議会下院議員ジム・ドビンとヘザー・アシュトン教授の両名は、デービッド・キャメロン英国首相から、上記のとおり、この薬害問題についての評価を受けました。

英国議会下院の本会議において、All Party Parliamentary Group on Involuntary Tranquilliser Addiction: APPGITA 英国の「非自発的（医原性・医療による）精神安定剤（抗不安薬・睡眠薬）依存症の全政党議員連盟」代表のジム・ドビン議員の質問に対するキャメロン英国首相の発言。

8d. 英国キングス・カレッジ精神医学研究所名誉教授・ 国際権威



マルコム・レーダー教授

2014年8月8日

(和訳文)

親愛なるウェイン

あなたは間違いなく日本裁判による誤審を受けました。深く同情する次第です。

英国では現在、患者のベンゾジアゼピン系処方薬（抗不安薬・睡眠薬）使用管理が注意義務違反とみなされる場合に限り、裁判外で和解が成立しています。ベンゾジアゼピンの処方期間が4週間を超えて不当に延長された場合は、その明らかな証拠とみなされることが増えています。私たちの医療弁護団は、膨大な法的・経済的影響を見始めているような気がします。もちろん、私たちには大きな重みを持つ「英国医学会・薬学会共同編集」のガイドラインがあります。日本にそれに相当する権威があるかどうかはわかりません。

敬具

マルコム・レイダー

大英勲章第4位、法学士、博士号、医学士、科学博士、英国精神医学会フェロー、英国医学アカデミーフェロー。英国ロンドン大学精神医学研究所名誉教授（臨床精神薬理学）。
ロンドン・キングス・カレッジ
精神医学研究所

8e. 英国議会下院の全政党議員連盟



全政党議員連盟（代表ジム・ドビン議員）

2014年7月11日

（和訳文）

親愛なるウェイン

All Party Parliamentary Group on Involuntary Tranquilliser Addiction: APPGITA
英国の「非自発的（医原性・医療による）精神安定剤（抗不安薬・睡眠薬）依存症の全政党議員連盟」と英国の支持者を代表し、世界的な問題となっている非自発的精神安定剤依存症に対するウェイン・ダグラス氏の日本でのキャンペーンを称賛したいと思います。

私たちはまた、精神安定剤（抗不安薬・睡眠薬）依存症からの安全で成功する離脱方法として、[アシュトン・マニュアル](#)を国民保健サービスに採用するよう、英国でキャンペーンを行っています。

ジム・ドビン議員
APPGITA 議長

8f. 英国議会への招待



全政党議員連盟のジム・ドビン議長付政務調査員・事務員

2014年8月11日

(和訳文)

親愛なるウェイン

下院内務特別委員会は、処方された医薬品、特にベンゾジアゼピン系処方薬剤（抗不安薬・睡眠薬）と抗うつ薬の依存症が引き起こす社会的害について調査を計画しています。私は委員会から、提案された証人のリストを提供するよう要請されています。委員会は国際的な証人を呼びたいと考えていますが、あなたの名前を推薦しますか？調査はウェストミンスター議会でおそらく2014年12月に開催される予定で、費用も用意されています。よろしくお願ひします。

マイケル・ビーハン

APPGITA 調査員・事務員

上記の通り、処方薬、特にベンゾジアゼピン系薬剤や抗うつ剤の依存症によって引き起こされる社会的損害についての国際調査に参加するよう私の名前が提出されました。この調査は英国下院内務特別調査委員会によって計画されていたもので、英国議会で実施される予定でした。しかし、ジム・ドビン議長の急逝によって延期されたままとなりました。APPGITA 処方薬物依存に関する全政党議員連盟は APPGPDD に取って代わられました。



ニュース抜粋：先週末、患者の権利とケアのための偉大な、しかしほとんど知られていない戦士が亡くなった。非自発的（医原性・医療による）精神安定剤（抗不安薬・睡眠薬）依存症に関する全政党議員連盟の議長であったジム・ドビン議員は、ポーランドへの人権訪問中に73歳で急逝した。彼は炭鉱労働者の息子で、微生物学者となり、1997年から労働党議員（グレーター・マンチェスターのヘイウッドとミドルトン）を務めた。前回の選挙では5,971人の多数を獲得した。ローマ法王ベネディクトより法王騎士の称号を授与された。

10年以上前、彼は英国に150万人いる、医師から処方されたベンゾジアゼピンや「Zドラッグ」（類似薬）依存症に悩まされている患者たちのためにこの問題を取り上げた。デイヴィッド・キャメロン首相がこの問題を取り上げたのは、彼の働きかけに応えたもので、昨年10月に議会でこう述べた（ハンサード900621）：（上記英国首相発言参照）。出典：www.conservativewoman.co.uk（[記事を読む](#)）

8g. 英国精神科医・科学者・精神薬理学者・作家・ 名誉教授・世界権威



Dr. David Healy
Psychiatrist. Psychopharmacologist. Scientist. Author.

Home Blog Bio Politics of Care Books Articles Resources Contact

Making medicines safer for all of us

Adverse drug events are now the fourth leading cause of death in hospitals.

It's a reasonable bet they are an even greater cause of death in non-hospital settings where there is no one to monitor things going wrong and no one to intervene to save a life. In mental health, for instance, drug-induced problems are the leading cause of death — and these deaths happen in community rather than hospital settings.

There is also another drug crisis — we are failing to discover new drugs. [Read more...](#)

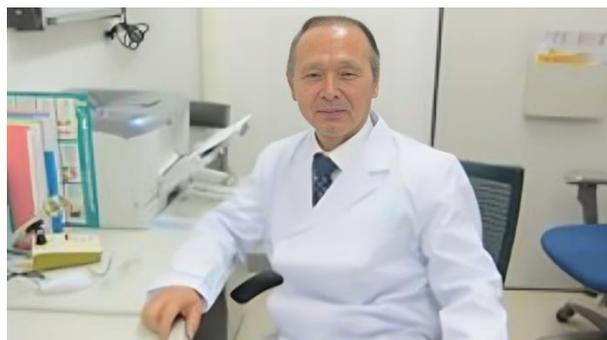
デーヴィッド・ヒーリー教授
2014年7月月15日
(和訳文)

親愛なるウェイン

あなたがこのサイト ([ベンゾ・ケース・ジャパン](#)) で行っていることは素晴らしい。ベンゾジアゼピン系処方薬剤（抗不安剤・睡眠薬）を含む向精神薬、取り分け、抗うつ薬の依存性を啓発することが重要です。これらの薬物の全てが過剰に処方されています。

[デーヴィッド・ヒーリー](#)
精神医学名誉教授
イギリス

8h. 杏林大学名誉教授



杏林大学医学部保健学科の田島治教授

2014年7月21日

(ウェイン・ダグラス氏の活動・ウェブサイトについて)

日本では日常生活のストレスによる不安や落ち込み、医学的な検査で説明できない身体的不調に対して、ベンゾジアゼピン系の抗不安薬や睡眠薬を含む種々の向精神薬が長期に漫然と処方されています。多くの医師がこれらの薬の減量や中止によって生じる問題の重大性を認識していません。このサイト ([ベンゾ・ケース・ジャパン](#)) は、薬からの離脱に悩む人々と、処方する医師の双方に重要な情報を提供しています。

田島治
精神科専門医
杏林大学名誉教授

上記推薦をお願いした当時、同教授から届いたお返事（原本は英語）

Dear Mr. Douglas,

(和訳文)

ご連絡ありがとうございます。あなたのお名前と、ベンゾジアゼピン離脱症候群の長期化に苦しみ、[アシュトン・マニュアル](#)の日本語訳に尽力されていることは、すでに存じ上げております。あなたの依頼をお受けしたいと思えます。このような機会をいただけて光栄です。私は、日本や他の多くの先進国において、ベンゾジアゼピン系処方薬剤（抗不安薬・睡眠薬）を含む向精神薬が過剰に処方されている現状をととても憂慮しています。ヒーリー教授は私の親しい友人であり、今私はこのような状況を変えようとしています。後ほど日本語で簡単なメッセージを送りたいと思えます。

Sincerely
Osamu Tajima MD, PhD
Prof. of Psychiatry and Mental Health
Kyorin Univ. School of Health Sciences

8i. 久留米大学名誉教授



稲永和豊教授

2014年8月19日

(ウェイン・ダグラス氏の活動・ウェブサイトについて)

抗不安薬や睡眠薬の中で、ベンゾジアゼピン系処方薬物は不眠や不安の治療に広く使用されています。使用に当たり注意しなければならないことは、長期間使用により、しばしば耐性が生じ、その結果離脱症状として不安、いらだち、不眠、その他数々の思いがけない精神神経症状が現れることがあります。このウェブサイト ([ベンゾ・ケース・ジャパン](#)) は抗不安薬や睡眠薬の処方を受けられる方にとっても大切な情報を提供してくれるものと期待しています。

稲永 和豊

久留米大学名誉教授 精神科医

8j. 日本の薬害専門医・第一人者



東京大学医学部卒業、薬害オンブズパーソン会議(副会長)、
新横浜ソーワクリニック名誉院長の別府宏圀医師
2020年7月4日

(ウェイン・ダグラス氏の薬害裁判について)

(「自律神経失調症」が)誤解を招く医学用語であることは、裁判官も承知の上で書いている(判決なのです)。そんなことは素人だって分かっているのです。裁判官も、最初から、貴方を敗訴にするつもりで、話を聞き、両方の言い分をきちんと聞いたふりをして、このように結論を導き出したのです。

自分たちの判決文の矛盾など、多分分かりすぎるくらい分かって書いているのです。まず、初めに結論あり、その結論になるように、論理をこねくり回して作りあげた判決です。言葉遊びをしているだけなのです。

専門家はこう言っている、添付文書にはこう書いてあるなどと、都合のよいことだけを証拠にして、貴方は薬のせいでこうなったのではなく、もともと自律神経失調症、あるいは日本での生活でストレスが多かったからこういうことになったのだと、書いているだけです。読んでいだけで、気分が悪くなるようなひどい判決です。

プロフィール

別府宏圀医師：東京大学医学部卒業、東京都立神経病院神経内科部長、新横浜ソーワクリニック院長、開業神経科、医薬品の監視、日本初の独立医薬品情報誌『正しい治療と薬の情報』(TIP)を創刊、前記の誌編集委員、NGO 薬害オンブズパーソン会議(副会長)、NPO DIPEX-Japan、健康と病いの語り(理事長)、日本臨床薬理学会、日本薬剤疫学会名誉会員、主な著書に『医者が薬を疑うとき』、訳書に『世界のエッセンシャルドラッグー必須医薬品』、監訳書に『子宮頸がんワクチン問題』、監修書に『[アシュトンマニュアル](#)』

8k. 英国嗜癮治療専門家



ディアドレ・ボイド

2014年9月20日

(和訳文)

親愛なるウェイン

[ベンゾ・ケース・ジャパン](#)の素晴らしいウェブサイトと、ベンゾジアゼピン系処方薬剤（抗不安薬・睡眠薬）の危険性に関する情報発信、またその他の教育活動、おめでとうございます。

患者が、医師は最善のものだけを処方し、「害を与えない」と信じています。しかし、中毒性・依存性で精神作用のあるこれらの処方薬物によって、あまりにも多くの人生が破壊されているのは現状であります。

その危険性を知っている人はあまりにも少なく、ベンゾジアゼピン系処方薬剤（抗不安薬・睡眠薬）から立ち直るための助けをどこで得られるかを知っている人は、さらに少ないのです。患者のニーズに応えるため、医薬品に代わるより健康的でホリスティックな代替的療法も広く利用できるようにすべきです。

今日、ほとんどすべての人がアルコールやタバコの害について知っているように、ベンゾジアゼピン系処方薬剤（抗不安薬・睡眠薬）の害についても知っておくべきです。あなたのような活動は緊急に必要であり、支援され、拡大されるべきものです。

ディアドレ・ボイド

DB リカバリーリソース日刊ニュース責任者

嗜癮回復協会・会長

アディクション・トゥデイ編集長

嗜癮性障害に関する英国・欧州シンポジウムの創設者

9. 世界ベンゾ注意喚起の日 (W-BAD) の 評価・支持



9a. 英国でベンゾジアゼピン系処方薬物（抗不安薬・睡眠薬）離脱治療クリニックを12年間運営した神経精神薬理学の専門家から



ヘザー・アシュトン教授

2017年5月18日

（和訳文）

皆様のご尽力により、「世界ベンゾ注意喚起の日」（[W-BAD](#)）は恒例の記念日となりました。

ベンゾジアゼピン処方薬物（抗不安薬・睡眠薬）依存症という災いに注意を喚起し、そうすることで、何百万人という、自分のせいでもないのにベンゾジアゼピン依存症に苦しみ、今も苦しんでいる人々のために立ち上がるために行われているすべてのことに深く感謝しています。これまでの数十年にわたる注意喚起活動、そして最近の **W-BAD** による活動を通じて、進展があったことを心から祝福します。この素晴らしいキャンペーンの発展を心から祈ります。

数え切れないほどの人々が同じ闘いの中で戦っていることがわかっています。私が知っている人もいればまだ知らない人も沢山いるでしょうが、彼ら全員に同じ感謝と敬意、そして温かさをもって敬意を表します。

[ヘザー・アシュトン](#)教授 C. Heather Ashton, D.M., F.R.C.P. 英国ニューカッスル・アポン・タイン大学名誉教授、臨床精神薬理学

9b. 科学文献にベンゾジアゼピン系処方薬の問題点を記述した最初の専門家の一人から



マルコム・レーダー教授

2017年5月10日

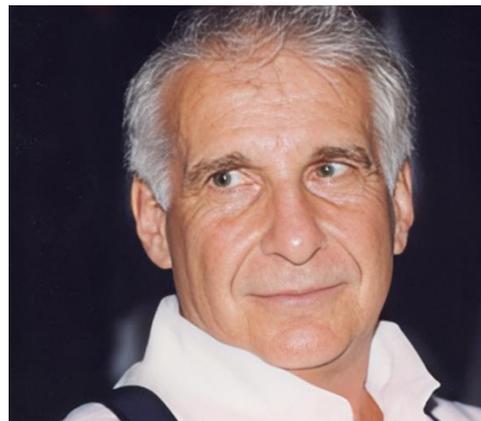
(和訳文)

「世界ベンゾ注意喚起の日」が恒例イベントになり、私はこの発展を歓迎し、支持します。現時点で進行中の困難な医学的問題への関心が一時的に高まりますが、その関係者が他のことに移ってしまい、元々の問題は沈静化してしまうことがあまりにも多くあります。医原性（医療による）ベンゾジアゼピン系処方薬剤（抗不安薬・睡眠薬）常用量依存症の問題は決して小さくなってはいません。[W-BAD](#)の取り組みの関係者や参加者の皆さんに感謝します。

[マルコム・レイダー](#)

大英勲章第4位、法学士、博士号、医学士、科学博士、英国精神医学会フェロー、英国医学アカデミーフェロー。英国ロンドン大学精神医学研究所名誉教授（臨床精神薬理学）。ロンドン・キングス・カレッジ精神医学研究所

9c. ハーバード大学誉教授、米国国立精神衛生研究所 (NIMH)の元医系技官から



ピーター・ブレギン医学博士

2017年7月4日

(和訳文)

ベンゾジアゼピン系処方薬剤（抗不安薬・睡眠薬）は人類の疫病となり、何百万人の脳と身体に害を及ぼし、深刻な離脱反応も引き起こしています。ベンゾジアゼピン系薬剤を長期に処方内服した人は、長引く有害作用（後遺症）に苦しむことがあまりにも多くあります。[W-BAD](#)のウェブサイトと「世界ベンゾ注意喚起の日」の運動は、これらの薬物の危険性を広める一助となります。また、禁断症状と闘っている人々の感動的な事例を紹介し、世界の皆さんにこの処方薬物の危険性を啓発しています。適切な援助があれば、多くの人が回復し、満足のいく人生を送ることができます。

私の著書『精神科治療薬の離脱』（Psychiatric Drug Withdrawal）には、ベンゾジアゼピン系処方薬物やその他の精神科治療薬を安全に離脱する理由と療法が書かれています。

[ピーター・ブレギン医学博士](#)

10. 私が受けた取材

10a. ジャパンタイムズ紙の特集記事



2012年3月13日（火曜）

サイモン・スコット記者

ニュージーランド人敗訴 医療によってもたらされた深刻な 薬物依存をめぐる争い

— ベンゾジアゼピンの危険性を訴える在日外国人 —



変わり果てた男： ベンゾジアゼピン中毒に苦しめられ、正義と賠償を求めて最高裁判所まで闘ったウェイン・ダグラスさん。最高裁は審理を拒否した。ダグラスさんによると、医師から“根治療法”の一環と言われ、ベンゾジアゼピンを7ヶ月間処方された。（写真・文：サイモン・スコット）

2001年の初め、ウェイン・ダグラスさんが日本から母国ニュージーランドに帰国した時、空港で対面した母親は、最初、自分の息子と気付くことが出来なかった。

[続きを読む](#)

10b. ニュージーランド・ヘラルド（NZ 最大の新聞）



2012年4月15日（日曜）
クロエ・ジョンソン記者

裁判に負けても闘い続ける薬物依存被害者

日本で精神安定剤（訳注：を不当に処方され）依存症になった英語教師が、10年にわたる賠償請求訴訟で敗訴した。しかし、彼はあきらめないと言う。

[続きを読む](#)

10c. 読売新聞（1）



2012年8月20日（月曜）

佐藤記者

抗不安・睡眠薬依存（8） マニュアル公開記念・アシュトン教授に聞いた

英国ニューカッスル大神経科学研究所教授のヘザー・アシュトンさんが作成し、バージョンアップを続けてきた[アシュトン・マニュアルの日本語版](#)が、8月19日夜、ついに公開された。当初の予定よりも遅れたが、精緻に練り上げた訳文は読みやすく、日本の実情に合わせた注釈も加えられた。

アシュトンさんと連絡を取り合いながら日本語版を完成させたのは、以前紹介した田中涼さんと、ニュージーランド人で翻訳家兼英語講師のウェイン・ダグラスさん。2人とも日本でベンゾの長期投薬を受け、常用量依存に苦しんだ被害者だ。ボランティアで翻訳作業を続けた2人に敬意を表したい。医学監修は、「正しい治療と薬の情報」誌編集長の別府宏圀さん（神経内科医）と、東北文化学園大教授の田中勵作さん（神経生理学）が行った。

このマニュアルの最後に記された田中さんらの思いを、精神医療に携わる人々は真摯に受け止めて欲しい。「このマニュアルは、ベンゾジアゼピン依存や離脱についての情報がなく困っている患者のためだけに翻訳されたのではなく、医師、薬剤師、製薬企業の方、厚労省の方へのメッセージでもあります」

[続きを読む](#)

10d. 読売新聞（2）



* Benzo Case Japan

<http://www.benzo-case-japan.com>



インターネットサイトの作成に力を入れる
ウェイン・ダグラスさん（長野県の自宅で）

2014年4月11日（金曜）

医療ルネサンス No. 5796 シリーズ薬 危険な処方

佐藤記者

安易な継続で依存症状

先月下旬、抗不安薬と睡眠薬の多くを占めるベンゾジアゼピン系薬剤の有害性や減薬法を紹介するインターネットサイト「Benzo Case Japan」が開設された。ニュージーランド人のウェイン・ダグラスさん（47）が、英国人医師らの協力で日本語版と英語版を完成させた。ダグラスさんは日本文化に興味を持ち、25歳で初来日した。全国各地の自治体で働き、国際交流の担当や英語講師などを務めた。

[続きを読む](#)



2014年7月22日（火曜）編集委員・浅井文和

14年(平成26年)7月22日 火曜日 第1頁

睡眠薬・抗不安薬、注意を

処方量だけで依存症も

医師から処方された睡眠薬・抗不安薬を飲んでいて、薬物依存になってしまう患者がいる。薬をやめられなくなったり、やめた後に離脱症状が出たりして、苦しんでいる。広く使われている薬だが、量を減らす試みも始まっている。

服用やめ体調悪化

長野県松本市に住むウェイン・ダグラスさん(47)はニュージーランドから1992年に来日し、英語教師や国際交流の仕事に携わっていた。日本語が堪能で、仕事は順調だった。

2000年にめまいの症状が出て、耳鼻科にかかった。脳の病気が診断され、ベンゾジアゼピン系抗不安薬を処方された。この薬は不安、不眠、抑うつといった症状がある患者に、広く使われている薬だ。

飲み始めるも、めまいは落ち着いたものの、2カ月たないうちに体のふらつきが起きた。4カ月後から

強い不安に悩まされた。仕事を続けられず、01年にニュージーランドに帰国。ベンゾジアゼピン依存症と診断された。薬物中毒治療専門の医師を受診し、

薬の量を少しずつ減らしてゼロにした。しかし、断薬後も離脱症状に苦しんだ。ひどい不安感や情緒の不安定、光を異常にまぶしく感じ、テレビを見られないう。体が力が入らず歩けない。断薬して1年間で多くの症状は消えたが、突然の不安感には10年経っても続いた。「依存症は生き地獄。希望を失う人もいる。離脱症状の適切な治療を受けられる施設が必要です」

神戸市の40代男性も、ベンゾジアゼピンの常用量の依存とは、医師が治療のために処方する常用量でも長期使用することで薬の依存が起る状態を指す。8カ月以上続けるとなりがやすいという報告もある。薬をやめると離脱症状として不安や、不眠、発汗、けいれん、知覚過敏などが出ることもあるとされる。

東京女子医科大学病院では、ベンゾジアゼピン系薬を処方されている患者数が一昨年の8580人から昨年は7054人に約18%減った。医師と薬剤師が対策に取り組んだ結果だ。

ベンゾジアゼピン系睡眠薬・抗不安薬の作用や副作用、薬以外の対処法を知ってもらおうと、患者向けの冊子をつくって薬剤師が配った。医師や薬剤師が参加する勉強会も開いてきた。

東京女子医科大学の福田健講師(精神医学)は「患者は副作用に気付いていないこともあって、情報提供が大切だ。薬をやめるときは1年で半減するくらいゆっくりと」と説明する。

厚生労働省は薬の使い過ぎ対策に乗り出す。1回の処方でも抗不安薬を3種類以上出した場合、医療機関に払われた診療報酬を減らす。改定を10月から実施する。

(編集委員・浅井文和)

「自己判断で中止は危険」

杏林大学の田島治教授(精神保健学)によると、欧米では1970年代以降、ベンゾジアゼピン系薬による依存や乱用が問題になり、英国では処方日数が制限された。「日本で長期

の離脱症状で苦しんできた。社会不安障害と診断され、09年まで4年半、医師の指示通り飲み続けた。やめた2日後から、興奮にまぶしい、目が痛いなどの症状が出た。医師に相談すると「離脱症状の可能性がある」と言われた。今でもまぶしさや、まぶたのけいれん、筋肉がびくびくする症状がある

ベンゾジアゼピンの常用量依存とは、医師が治療のために処方する常用量でも長期使用することで薬の依存が起る状態を指す。8カ月以上続けるとなりがやすいという報告もある。薬をやめると離脱症状として不安や、不眠、発汗、けいれん、知覚過敏などが出ることもあるとされる。

東京女子医科大学病院では、ベンゾジアゼピン系薬を処方されている患者数が一昨年の8580人から昨年は7054人に約18%減った。医師と薬剤師が対策に取り組んだ結果だ。

ベンゾジアゼピン系睡眠薬・抗不安薬の作用や副作用、薬以外の対処法を知ってもらおうと、患者向けの冊子をつくって薬剤師が配った。医師や薬剤師が参加する勉強会も開いてきた。

東京女子医科大学の福田健講師(精神医学)は「患者は副作用に気付いていないこともあって、情報提供が大切だ。薬をやめるときは1年で半減するくらいゆっくりと」と説明する。

厚生労働省は薬の使い過ぎ対策に乗り出す。1回の処方でも抗不安薬を3種類以上出した場合、医療機関に払われた診療報酬を減らす。改定を10月から実施する。

(編集委員・浅井文和)

睡眠薬・抗不安薬の副作用

東京女子医科大学病院の情報提供冊子をもとに作成

翌日の眠気

朝の目覚めがすっきりしない。日中も眠い

ふらつき・転倒

筋肉の緊張が緩み転倒しやすくなる

健忘

薬を飲んだ後の行動を覚えていない

依存性

薬をやめたときに離脱症状が出てやめにくくなる

良い睡眠のために薬以外の対処方法

生活リズムを整える

- 毎日同じ時間に起きる
- 太陽の光を浴びる。適度な運動も
- 眠くなってから布団に入る。睡眠時間には個人差がある
- 昼寝は30分以内

リラクスのコツを身につける

- リラクスのための呼吸
- 「丁寧に息を吐く」を意識して、3秒吸って3秒吐くイメージ
- 酒は不眠のもと
- お風呂で温まる

すると歯周ポケットと呼ぶ歯を失う原因は歯周病

注：この記事は薬物関連障害の調査に言及していますが、この調査は大きな欠点があり、実態を示すという目的を果たしていないと思われます。記事のダウンロード

10f. Stuff NZ (ニュージーランドの大手通信社)



睡眠、不安、ストレス、筋肉弛緩などのために処方されるベンゾジアゼピン系薬物の依存性や危険性の注意喚起活動をしているウェイン・ダグラス氏。
写真：同人は横浜で開催された国際学会での発表ポスターや創立者として立ち上げた「世界ベンゾ注意喚起の日」のホームページを紹介。

2019年2月13日(水曜)
ステファニー・ミッチェル記者

東京からタラナキへ 処方薬がウェイン・ダグラス氏の 人生をいかに破壊したか

日本で地獄のような日々を過ごしたウェイン・ダグラスは、故郷に戻ることで救われると考えていたが、そうではなかった。

[続きを読む](#)

11. 私のことについて



新宿駅前で W-BAD のチラシを手にする私

名前： ウェイン・ダグラス
生年月日： 1966 年 9 月 9 日
出身地： ニュージーランド、
オークランド市南部
大学専攻： 日本語
職歴： 国際関係促進、翻訳、
英語教師、イベント企画
趣味： アウトドア、
ジムトレーニング、料理
日本滞在： 約 25 年（2024 年の時点で）

経歴：

私は生まれて 6 週間後に養子に出されました。ニュージーランドのオークランド市南部にある下流中産階級の郊外住宅で育てられました。4 歳の時、養父は家から出て、養母はフルタイムの仕事をしなが、ただひとりで私と弟を育てることになりました。9 歳の時、私は全寮制の学校に入学しました。

義務教育を終了して、建設業で働き始めました。しかし、80 年代後半ごろ、不景気になったため、解雇され再就職することも困難でした。その当時、日本観光客が多かったので、「成人教育制度」を通じて他の高校に編入し、日本語を勉強することに決めました。

翌年、大学の日本語科にて勉強を続けるために、都会に引っ越しました。しかし、学費は高く、知らないうちに、学資ローンや銀行ローンを組んで、また大学の勉強を最後までやり抜くため、母が自分の将来の年金を前借りし、私に貸してくれました。お母さんの期待に応えるため、私は一生懸命に勉強して、日本語学習成績優秀者ニュージーランド代表として 2 週間の研修参加で初来日しました。ついに 1995 年に卒業しました。

卒業後、学費ローンの返済また日本語を上達させるため、再来日をし、様々な政府機関において国際交流関連の仕事に従事して参りました。たとえば、宮崎県北方町役場の国際交流担当や埼玉県国際交流協会の国際交流担当などを務めました。成績が上がるにつれ、人事院関東事務局の中堅係員研修会にて異文化コミュニケーションの講師を務め、霞が関の自治体国際化協会への推薦も受けました。また、テレビ出演（ここが変だよ日本番組への招待）などの機会もありました。

私の仕事の業績は日本、ニュージーランド両国でテレビや他のメディアにおいて注目され、高く評価されました。全てが順調に行っていましたが、2000 年の 5 月 11 日には変わってしまいました。

[続きを読む](#)

12. 私の薬害裁判について



最高裁判所の前で調書（判決書）を手にする私

私の訴訟案件は、日本初のベンゾジアゼピン系処方薬物（抗不安薬・睡眠薬）による薬害裁判になりました。

日本の薬害専門医・第一人者の別府博園医師によれば、日本ではベンゾジアゼピン系処方薬物依存症を臨床的に立証することに当たり、初めて論理が適用されたとのことでした。その意味でだれでも訴訟できるように前例を作りました（[裁判ページ参照](#)）。

しかし、裁判はその論理・依存症診断基準を捻じ曲げて敗訴を構成し、正当な正義を否定したのです。

裁判の概要・主な経過

- 2003年2月： 訴訟準備開始。
- 2006年2月： 東京簡易裁判所で、私はひとりで民事調停を申し立て、最初は弁護士を立てずに自力だけで病院側との口頭弁論を始めた。
- 2007年6月： 東京地方裁判所で第1審開始。
- 2008年9月： 住む場所も仕事もお金もないまま、原告本人尋問のために再び日本に戻ってきた。
- 2009年9月： 東京高等裁判所で第2審開始。
- 2011年5月： 最高裁判所に上告した時（東日本大震災の最中）も弁護士を立てずに自力で手続きをした。そこまで行ったところで、この闘いは終わった。
- 2011年11月： 最高裁判所の決定が下された。

主な証拠： 本件は、主に各患者カルテおよびDSM-IV-TR 薬物依存（物質依存）診断基準に基づいた。

主な争点： 全く不適切なことに、本件は、私の症状が医原性BZD系薬剤依存症であったのか、または「自律神経失調症」であったのかを証明する裁判となった。

注意点： BZD依存症および離脱反応により、私の神経系全体のシステムの活動が亢進していたので、この主張は、全く非論理的なものであった。

上記のようにベンゾジアゼピン系処方薬物（抗不安薬・睡眠薬）により、私だけではなく多くの人々がいかに苦しめられているのかを理解してもらおうようと、準備を入れておよそ10年間をかけ日本で（日本語で）最高裁まで裁判を進めました。

私と代理人弁護士は、この処方薬物の危険性をより啓発し、また日本でより安全な処方ガイドラインが設置されるよう、本気で判例をつくってやろうと、この裁判を一所懸命に進めました。しかし、裁判は事前に決められた評決に達するため、現実をねじ曲げながら、欺瞞に満ちた偽りの展開を構築し進行されました（[日本薬害専門医の所見参照](#)）。

13. 私の活動やこの社会問題への貢献



2016年7月：東京都議員の上田令子と私
新宿駅前での街頭演説と W-BAD チラシ配布（フジテレビ取材）

2023

(2023年9月19日)：厚生労働省において、ジス環境改善会代表の川島さんと一緒に面談に出席し、目的は、厚生労働省が公表した「重篤副作用疾患別対応マニュアル」（ベンゾジアゼピン受容体作動薬の治療薬依存）と題するマニュアルの改正と必要な行政措置を訴えること。

(2022年12月～2023年9月)：ミハイラ ピーターソンからの依頼を受け、ベンゾジアゼピン処方薬の危険性についての記事作成。

(2023年7月)：[第8回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)。第7回の「世界ベンゾ注意喚起の日」の運営、[W-BAD ユーチューブチャンネル](#)の再開。

(2020年4月13日)：参議院会館の川田龍平の事務所において、薬害オンブズパースン会議代表の別府宏圀医師とジス環境改善会代表の川島さんと一緒に面談に出席し、目的は、厚生労働省が公表した「重篤副作用疾患別対応マニュアル」（ベンゾジアゼピン受容体作動薬の治療薬依存）と題するマニュアルの改正と必要な行政措置を訴えること。

2022年

(2022年7月)：[第7回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)。第7回の「世界ベンゾ注意喚起の日」の運営、町でのチラシ配布。

2021年

(2021年7月)：[第6回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)。第6回の「世界ベンゾ注意喚起の日」の企画として、同活動基盤の復活への実施（下記参照）。

2020～2022年

(2020～2022年)：内部的な転覆による破壊を受け、丸2年間をかけ、「世界ベンゾ注意喚起の日」の復活・再建。

(2020年8月～2021年8月)：最初一年間の復活作業のごく一部の例として、様々な改善提案書の提出をはじめ、「世界ベンゾ注意喚起の日」の経過記録書・事実確認書(1,227頁)および「世界ベンゾ注意喚起の日」の報告書(47頁)とその添付書類(25頁)、また関連書類10冊、ビデオアナウンス、世論調査などの大作業。

(2020年8月～2021年8月)：「世界ベンゾ注意喚起の日」[\(W-BAD\)のホームページ](#)の全面的な再建に努め、復元、リストラ、再び人間化を取り戻す努力、内容の再整理や更新や編集、また発展の可能性を高める企画の導入(上記最初一年間の復活作業およびホームページの再建にかけた丸2年間の作業中、わずか2日間の休みしか取らなかった)。
[\(詳しくは再開の知らせをご覧ください\)](#)。

2020年

(2020年11月17日)：政治家による宴会において、ベンゾジアゼピン処方薬物関連情報の提供（参加者：参議院川田龍平と奥様の堤未果（ジャーナリスト、国際的著作家）、元総理大臣菅直人、約100人の政治家、全国ベンゾジアゼピン薬害連絡協議会（BYA）の代表多田雅史、「精神医療の真実」の代表嶋田和子、約5人の薬害被害者）。

(2020年7月11日→8月11日)：[第5回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)。厚生労働省の陳情訪問への参加、また社会人による要望書提出。注：コロナの影響でこの第5回の陳情訪問が1ヶ月で延期され、参加者も5人に制限（[詳しくはこちらをご覧ください](#)）。

(2020年6月23日)：予備企画として、町でのチラシ配布・投函、社会人による上記要望書への署名活動（[詳しくはこちらをご覧ください](#)）。

(2020年4月29日)：集団訴訟の案件で、全国ベンゾジアゼピン薬害連絡協議会（BYA）への参加願望書（10頁）提出（この案件を引き受ける弁護団は出なかったため一時中止）。

2019～2020年

(2019年12月～2020年7月)：下記の一連のビデオ動画の編集・投稿。

(2020年2月2日)：れいわ新撰組街頭演説で撮影した動画（[薬害について山本太郎への質問・訴え](#)）の投稿。

(2020年5月31日)：第5回の「世界ベンゾ注意喚起の日」の動きに繋がるよう「[衆議院・参議院でのベンゾ情報ポスティング](#)」（日本語版および[英語版](#)）というビデオ動画の投稿。

(2020年7月11日)：第5回の「世界ベンゾ注意喚起の日」を記念するため行事内容の一環として、衆議院第一会館で撮影した動画（[ベンゾジアゼピン系処方薬物勉強会](#)）の投稿。

(2020年7月11日)：第5回の「世界ベンゾ注意喚起の日」の仕上げとして、[記者会見](#)（衆議院で開催された「ベンゾジアゼピン系処方薬物勉強会」についてのQ&A）というビデオ動画の投稿。

2019年

(2019年12月6日)：国会（衆議院第一会館・第二会館および参議院会館）での[ベンゾ情報ポスティング](#)、当時の総理大臣（安倍晋三）の事務所（衆議院会館）をはじめ、713人の国会議員全員へのベンゾジアゼピン処方薬物関連情報ポスティングや「世界ベンゾ注意喚起の日」のチラシ配布、また有名な政治家との面談（[詳しくはこちらをご覧ください](#)）。

(2019年11月24日)：れいわ新撰組街頭演説において[薬害について山本太郎への質問・訴え](#)、また「世界ベンゾ注意喚起の日」のチラシ配布。

(2019年11月7日)：厚生労働省において、衆議院で開催された「ベンゾジアゼピン系処方薬物勉強会」についての[記者会見](#)への参加（東京都議員上田令子議員、井上眼科病院名誉院長若倉雅人教授、企画者の多田ゆり子も出席）。

(2019年11月7日)：衆議院第一会館第一会議室で開催された「[ベンゾジアゼピン系処方薬物勉強会](#)」での[発表](#)（東京都議員上田令子議員、井上眼科病院名誉院長若倉雅人教授、企画者の多田ゆり子、その他の講演者、応援者、被害者、政治家なども出席）。

(2019年7月11日) : [第4回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)。被害者同士で厚生労働省の陳情訪問への参加、またその数週間前からのチラシ配布。

(2019年6月23日) : 予備企画として、地元のクラフトフェアでのチラシ配布や地元での投函 ([自分が追い込まれた状態の最中](#)) 。

2018年

(2018年7月11日) : [第3回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)。ニュージーランドのオークランド市内でのチラシ配布 ([詳しくはこちらをご覧ください](#)) 。

(2018年6月26日～) : 予備企画として、ニュージーランドのタラナキ地方においてコミュニティ (各公共団体や商店など) へのチラシ配布。

(2018年4月～7月) : [第3回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#) の準備。

2017年

(2017年10月31日) : 薬害オンブズパースン会議の代表者らと一緒に、厚生労働省で開かれた記者会見への参加。

(2018年7月中旬) : As Prescribed (ドキュメンタリー映画) への撮影場面提供 ([予告参照](#)) 。

(2017年7月11日) : [第2回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)。厚生労働省の陳情訪問の準備、当日の被害者同士による参加、その数週間前に亘るチラシ配布。

(2017年7月9日) : 予備企画として、松本市において500枚のチラシ配布 ([詳しくはこちらをご覧ください](#)) 。

(2017年3月21日) : 以下のとおり、[国への要望書](#)および2016年「世界ベンゾ注意喚起の日」の[厚生労働省への陳情訪問](#)の結果により、日本で処方されているベンゾジアゼピン系薬等44成分の[添付文書改訂指示](#)。

(2017年1月～7月) : 「世界ベンゾ注意喚起の日」の[公式ホームページ](#)作成の監督・調整、[第2回「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)の準備。

2016年

(2016年7月28日～2021年12月1日) : 第1回「世界ベンゾ注意喚起の日」をまとめるビデオ動画作成 (上記ビデオ参照) 。

(2016年7月11日): [第1回の「世界ベンゾ注意喚起の日」](#)。この世界的なイベントの総合運営、また厚生労働省において、被害者同士や政治家と一緒に、陳情不問への参加（上記ビデオ動画をご覧ください）。

(2016年6月27日): 予備イベントとして、「W-BAD チラシ配布作戦 in Shinjuku」という企画の準備のアシスト、また被害者同士や政治家と一緒に同イベントへの参加（上記ビデオ動画をご覧ください）。

2015～2016年

(2015年12月～2016年7月): [世界ベンゾ注意喚起の日](#)の設立。

(2015年4月): [薬害オンブズパースン会議](#)において、[ベンゾジアゼピン系薬物に関する要望書](#)の意見交換への参加（同要望書が2015年10月28日に関係各企業、厚生労働省、文部科学省、関連学会に提出され、ベンゾジアゼピン処方薬物がより厳重に管理するよう要求する内容）。

2014年

(2014年10月): [第16回国際嗜癖医学会](#)（International Society of Addiction Medicine: ISAM）年次総会の期間中、[パシフィコ横浜会議センター](#)において、[ベンゾジアゼピン系薬剤および類似薬剤](#)の“不適切な処方”による[危険性についての発表](#)。

(2014年3月): 少しでも参考になればと思って、私自身の経験やベンゾジアゼピン処方薬物関連情報を提供する当サイト（Benzo Case Japan）の設立。

2013年

(2013年中旬): 臨床研究の対象者として、日本の医師たちとアシュトン教授による医学文献作成への準備・協力（作成中止）。

(2013年3月): 日本の医師とアシュトン教授との間、情報交換サポート（他の医師に処方されたベンゾジアゼピン過剰投与により意識障害を起こした患者への対処方法について）。

(2013年1月): 高齢者のマニュアルへのアクセスがより容易になるよう、[アシュトンマニュアル日本語版](#)の印刷出版を提供する許可交渉。

2012年

(2012年8月)：[讀賣新聞によるアシュトン教授への取材 \(Q&A\)](#)をコーディネート（取材は日本国内におけるベンゾジアゼピンが引き起こす諸問題についての啓発）。

(2012年中旬)：[アシュトンマニュアル日本語版](#)の和訳へのアシスト（同マニュアルが2012年8月19日に一般公開）。

(2012年1月～現在に至る)：作成中の本「アンダー・ザ・ライジング・サン」の執筆や編集。この本がアシュトン教授に推薦され、世界的名誉医師たちからの積極的なサポートも受け、またロンドンの出版会社にも高く評価された（[詳しくはこちらをご覧ください](#)）。

2003～2011年

(2003年2月～2011年10月)：ベンゾジアゼピン処方薬物によって、私だけではなく多くの人々がいかに苦しめられているのかを理解してもらうようと、準備を入れておよそ10年間をかけ日本で（日本語で）最高裁まで裁判を進めた。私と代理人弁護士は、ベンゾジアゼピン系薬剤の危険性をより啓発し、また日本でより安全な処方ガイドラインが設置されるよう、本気で判例をつくってやろうと、この裁判を一所懸命に進めた（[裁判のセクション参照](#)）。

2000年中旬～

ベンゾジアゼピン処方薬物によって心身的にもひどく苦しまれる医原性損傷（すなわち依存症、離脱反応、副作用、有害作用、後遺症、一生の残る損害・損傷）を経験し（[私のストーリー参照](#)）、これが上記注意喚起活動への基盤を成すもの。

14. 上記ケネディへの脚注 (私のバックグラウンドなどについて)

参考資料として、私の献身的な薬害注意喚起活動の事例や自分のバックグラウンドについて、次ページの脚注を併せて送りました。脚注にも書きましたが、「世界ベンゾ注意喚起の日」を設立した当時、私は避難宿泊所に入居していて、かなり追い込まれた状態でした。



東日本大震災の翌年（2012年）
長野県の避難宿泊所の前に立っている私

この避難宿泊所でマイナス15度まで気温が下がる中、暖房を一切使わずに3年連続の冬を過ごし、厳しい寒さを耐えながら、「世界ベンゾ注意喚起の日」の設立をはじめ、その他の注意喚起活動にも積極的に取り組んで参りました。



当時の凍結した部屋の窓



当時のボロボロシート

今現在の生活状況は殆ど変わっていない。

脚注

以下は、これまでの私の献身的な活動に対する参考になるかもしれません。

私は日本での薬害事件及び不正な薬害裁判によるダメージを被った結果、同国での生活を容疑なくされた 58 歳になるニュージーランド人男性です。

私の薬害体験は、医原性（医療による）ベンゾジアゼピン系薬物依存症という生き地獄に関するものです。2000 年 5 月、めまい発作を起こし、原因は前庭神経炎（内耳炎）でしたが、中脳疾患として不当に診断されました。いずれの診断にせよ、処方された薬物は完全な矛盾で不適切でした。その翌年、母国のニュージーランドで薬物離脱治療を受け、何年も残酷な禁断症状に苦しまされていました（今も後遺症に悩まされています）。

数年後、私は再来日し、日本の司法制度全体（東京簡易裁判所での調停、東京地方裁判所、東京高等裁判所、最高裁判所への上告）をナビゲートし、壮大な試練となりました。

私の正義の追求は、自分の国とは異なる国や言語で行われ、まだ禁断症状の再発にも苦しんでいる最中で、本訴訟の内容がまさにオーソン・ウェルズの映画『審判』の奇妙なシーンのようなものでした。

上記映画と同じように、奇妙な裁判手続きは、事前に決められた評決に達するため、現実をねじ曲げながら、欺瞞に満ちた偽りの展開を構築し進行されました。しかし今日に至るまで、不正を暴き、真実を明かすことを思いとどまることはありません。事実、私の決意は強まるばかりです。

訴訟当時、福島に住んでいた私は、3.11 の東日本大震災と原発事故によって避難生活を余儀なくされました。多くの人々がハルマゲドンのような事態から逃げ惑う中、私は決してくじけることなく、放射能漏れ、余震、計画停電などの最中、避難をしながら、ロウソクの明かりを借りて日本語で資料を書き続け、最高裁への上告の準備をしていきました。

ようやく大阪で上告理由書および関連書類を靴箱いっぱいにとめたまで、私は転々と移動しながら 4 県の 6 カ所に寝泊まりして準備を続けました。結局、長野県の避難宿泊所に入居することになりましたが、そこで私の上告が却下されたという最高裁判所からの通知が届きました。

裁判が終結し、私はこれまで闘ってきた全てを放棄して自分個人の生活で前に進むか、あるいは、薬害という深刻な社会問題を少しでも改善してもらうよう、もう一回頑張るかという選択を迫られました。おそらく自己防衛の自然な働きに反し、より大きなベンゾジアゼピン系処方薬問題を認識しながらも、私は現状に屈することを拒否し、後者を選ぶことにしました。

避難宿泊所で食糧配給を受けながら、電気や水道などの停止通知が毎月のように届く中、私は自分のベンゾジアゼピン処方による薬害体験を記録した本を書き、「世界ベンゾ注意喚起の日」(W-BAD)を設立し、2014年に横浜で開催された第16回国際嗜癮医学会で当事者として、ベンゾジアゼピン系薬剤および類似薬剤(抗不安薬・睡眠薬)の“不適切な処方”による危険性について発表し、その他の活動も継続して参りました。

長野県の高山地帯でその追求を執拗に続け、マイナス15度まで気温が下がる中、暖房を一切使わずに3年連続の冬を過ごしました。厳しい寒さと乾燥のため、毎朝、口や鼻から血が出ていた状態で目覚めることがよくありました。

上記の努力にもかかわらず、数年間後、私が築き上げたW-BADの注意喚起プラットフォームは、陰湿な内部破壊工作にさらされました。このような状況においては珍しい出来事ではないと聞いています。

2017年12月、私は母国への再定住を試みましたが、日本での苦痛的な薬害事件や不正な薬害裁判が続いていた間、ニュージーランドのインフレが爆発的に増大し、この現状と日本で被った損害が相まって、帰国の試みが私の手に余るものであることがわかりました。その直後、麻痺したようなうつ状態に陥ってしまいました。

チェックメイトのような状態に追い込まれた私は、2019年5月、わずかに残っていた気力を振り絞り、取り敢えず、水面上に頭を上げていられる可能性が比較的高い日本へと、しぶしぶ戻ることにしました。一人暮らしで様々な健康問題を抱えている年老いた母をおいて、スーツケース1つを手握りトラウマの始まりの地に戻るのには、これまでで一番つらいことだったかもしれません。

再びホームレスになってもおかしくない状態になり、心が折りってどん底まで挫折状態に陥ってしまった私でしたが、7月11日の第4回W-BADを記念する厚労省での陳情訪問に何とか出席することができました。その後、同年11月に衆議院でのプレゼンテーションを行い、また同年12月にも各衆議院会館や参議院会館において713人の国会議員全員にベンゾジアゼピン系薬剤の危険性についての情報パックを配布して参りました。

私の貢献：<http://www.benzo-case-japan.com/my-story-japanese.php#c.-my-contributions>

それから数カ月後の2020年初頭、私は薬害注意喚起活動の仲間から「W-BADのプラットフォームを元に戻してほしい」という依頼を数多く受けるようになりました。当時の私は、まだ日々の生活に必死でしたので、最初はかなり躊躇していました。

しかし、なんとか行動せざるを得ないと感じ、W-BADの運動プラットフォームを破壊工作にさせた当時の役員全員を公然と糾弾し、プラットフォーム全体の再構築を進め、2022年7月4日に再スタートを切りました。

W-BADを再公開する3か月前からコロナの影響でフルタイムだった仕事がパートタイムになり、それ以降は収入も半分まで減少し、活動の維持がさらに難しくなりました。

その過程も数え切れないほどの困難があり、その多くは今日まで続いています。自分の国と違う国で再び生活を余儀なくされ、ホームレスになってもおかしくない同然の紙一重での日々が続いています。

また、高齢の母とは5年近く会っておらず、その前も10年ぶりに1度しか会っていませんでした。時折ICU（集中治療室）に搬送されるなど、劣れていく母の様子を遠くから聞くことは毎日苦痛です。

私は薬害の後遺症にも悩まされていますが、上記による苦悩と心痛に耐えながらも、薬害注意喚起活動や正義への追求も一歩ずつ前進させ続けています。

このような状況下で、本当の意味で何も持たない一個人として、前記の取り組みを担うための経済的な苦労は計り知れないものです（リアルタイムのコミュニケーションに基づく実例を参照）。

経済的な苦労の実例：

www.worldbenzoday.org/wp-content/uploads/2021/12/Communication-Extracts-sustainability-2.pdf

私のストーリーや活動の詳細は、個人サイト「[ベンゾ・ケース・ジャパン](http://www.benzo-case-japan.com)」をご覧ください。

ウェブサイト：<http://www.benzo-case-japan.com/index-japanese.php>